

心学のすすめ

中村正直。号は敬宇。彼は徳川幕府の学問所・昌平黌に学び、23歳で教授に列せられた秀才であった。慶應2年(1866)幕府から派遣されてイギリスに留学する。

1840年代の初め、世界のすべてと思われていた清国が阿片戦争でイギリスにもろくも敗北した。中村正直は儒者である。四書五経を修養の拠り所にしてきた。だが、その四書五経の本来本元である清国のもろさはどうしたことか。その動揺から、イギリスの強さの根源を見極めたいという気持ちが、留学する思いの中には大きかったようである。

ところが留学してみると、イギリスは日本とさして変わらない島国で、自然環境に恵まれているわけでもないし、物産が豊かというわけでもない。こんな小国がなぜ、世界の七つの海をわがものとするような繁栄を誇ることができるのか。留学中、中村正直はそのことを考え続けたが、どうしてもわからない。解き得ぬ謎であった。

留学してほぼ1年、日本では明治維新がなり、幕府は崩壊した。そのために中村正直は帰国しなければならなくなる。船に乗る彼にイギリスの友人が、長い船旅の無聊の慰めにと、「これはいま、聖書の次に読まれている」と一冊の本を渡してくれた。サムエル・スマイルズの『セルフ・ヘルプ』(自助論)である。

「天は自ら助くる者を助く」冒頭の一句が中村正直を惹きつけた。そこには志を立て、精進し、成功した人の実例が豊富に描かれていた。イギリスを繁栄に導いた根源はこれだ、と彼は感じ取り、夢中になって読んだ。船旅の間、繰り返し何度も読み、中身を暗記してしまったほどだったという。

日本は明治の世となり、元将軍の徳川慶喜は静岡に隠棲していた。幕臣だった中村正直も静岡に行き、そこでスマイルズの『セルフ・ヘルプ』を翻訳、静岡の出版社から『西国立志編』と題して出版する。

これが爆発的に読まれた。明治から大正にかけて、名をなした実業家、政治家、学者、果ては軍人まで、青年時代に『西国立志編』の洗礼を受けなかった人を探し出すのは難しいほどである。明治の青年は『西国立志編』によって志を立て、修養に励み、それぞれの道を確立していったのだ。

そのために、福沢諭吉は『西洋事情』によって知を拓き、中村正直は『西国立志編』によって徳を拓いたとされ、中村は「江戸川聖人」と謳われ、慶應義塾の福沢と並び称されたのである。

それはともかく、『西国立志編』が招来したものは、修養の時代だったと私は考える。志を立て、その志を実現するために精進し、修養に励む。これは強く論じられることはないが、明治から大正にかけての時代の基調には修養があり、それが東アジアの端に位置する日本を近代国

家に脱皮させ、明治、大正、そして昭和初期の自由に満ち、人間味に溢れた素晴らしい時代を出現させた源泉の一つだったと思うのである。このことは、当代一流の知識人である新渡戸稲造が『修養』を書き、それが有為な青年たちに熱烈に受け入れられた事実にもうかがえると思う。

しかし、修養は俗世の立身出世を目指す俗物処世術という考えが、主として知識階級の中から芽生え、膨らんでいった。修養を一段レベルの低い通俗哲学とみなす風潮が盛んになっていく。私はそれを「偽善の知」と考えるのだが、この風潮と日本が大東亜戦争の敗戦に向かって困難な時代に踏み込んでいくのが軌を一にしているのは、注目しなければならない。

だが、ここではこの問題はこれだけに止め、別の機会に改めて論じることにはしたい。

さて、中村正直の『西国立志編』だが、これ一冊でにわかに修養の時代が出現したわけではない。そこにはこれを受け入れ、人びとを修養に向かわせる土壌があったのだ。そして、それこそが日本の伝統である、と私は思っている。

世界を見回すと、宗教であれ哲学であれ、必ず一つの思想にリードされて文化を成熟させ、時代を形成してきている。それはキリスト教であり、仏教であり、イスラム教であり、あるいは自由主義であり、共産主義である、という具合である。そして、キリスト教社会では少しでもキリストに近づくこと、仏教社会では少しでも釈迦に近づくこと、共産主義社会では共産主義的人間になることが修養である、という形を取る。

同時に、社会をリードする一つの思想以外の思想は否定される。キリスト教社会ではイスラム教は異教であり、十字軍を編成して叩き潰す対象にさえなる。同じキリスト教を信奉していても、聖書の解釈の違いによっては異端として排除される。共産主義を目指す社会で自由主義を掲げれば、反革命分子として抹殺される、というふうである。また、そうすることでその文化を成熟させてきた、とも言える。

では、日本ではどうか。250 年間、国内でも国外でも一度も戦争せず、独特の文化を成熟させた江戸時代というのは、世界史的に見て実にユニークで特筆すべきものがあると思うのだが、そのユニークさについては専門家に譲るとして、これは儒教社会であった、と一応は言えるかと思う。確かに徳川幕府が掲げたのは儒教、それも朱子学であった。

では、江戸時代の日本は朱子学一色だったのか。そんなことはない。学者によって主とするものは、孔子であったり老子であったり、あるいは陽明学であったり、実にさまざまだった。また、重きを置くもの以外でも盛んに学ばれた。そればかりではない。一方では仏教が隆盛し、神道が奉じられていた。一方が他方を否定し、圧殺することはなかったのである。

日本のこの様相は朝鮮半島のそれと比べると、より明確になる。

朝鮮も日本と同様に儒教を受容し、本家本元の中国以上に完璧な儒教社会をつくり上げた。その内容は、朱子学一辺倒だった。だから、たとえば陽明学は朝鮮では全然発達しなかった。

そればかりではない。朝鮮は日本に仏教が入ってきたルートになったことでもわかるように、仏教が盛んだった。だが、朱子学の隆盛とともに仏教は圧迫され、下層階級の間で虫の息になってしまうのである。日本とはまったく違う。

日本のこのような状況を、融通無碍とか無原則、さらにはチャランポランと言う向きがある。だが、それは欧米流の概念に身を寄せた皮相な見方であると思う。

いまはあまり使われないが、日本には「心学」というものがある。人間の心を研究する心理学ではない。心を磨く学問、心学である。この心学は江戸時代が深まり、その文化が成熟するにつれて、盛んに使われるようになった。

この心学は、世界にひろがる概念を見事に逆転させた、日本独特の修養の伝統であると思う。これはいくら強調しても強調しすぎることはない。

世界のそれは、核として一つの思想がまずあり、その思想に適合するように人間の心を鍛えていくのが修養なのである。

しかし、心学はそうではない。まず中心にあるのは、人間の心である。その心を磨く。そのためにキリスト教であれ、仏教であれ、儒教であれ、あらゆる思想、宗教を学び、心を豊かにしていく。心学ではどんな思想でも宗教でも、人間の心を磨くための磨き砂なのだ。人間の心を磨くために思想や宗教に学ぶのが、日本の修養なのである。

どんな思想にも、どんな宗教にも、どんな哲学にも、心を磨くという観点に立てば、学ぶべきものは多い。だから、一つの思想、一つの宗教に凝り固まって、他を否定し、排除する必要はまったくない。

中村正直の『西国立志編』を契機に修養の時代が出現し、明治から大正、昭和初期にかけて素晴らしい時代を招いた土壌として、この心学の伝統を見逃すわけにはいかない。心学を近代的に発展させた人に講談社の設立者の野間清治がいる。彼が出版した『修養全集』には、孔子、釈迦、キリストの三者会談の絵が掲げている。

いま、世界は大きな節目に差しかかって混迷し、動揺している。それはまた、志が求められている時代だとも言える。事実、さまざまな分野に志を立てる場面が用意されているようである。だからこそ、日本の土壌にある心学の伝統を新たに、先賢先哲の学を拠り所にして修養に励むことが必要なのではないか。

その心学の流れを唯一受け継ぐ雑誌が『致知』である。その意味で私は、この雑誌がもっと多くの人に読まれることを願っている。「人間の心を磨く」ということを正面に据えた『致知』のような雑誌が起点となり、平成の時代を改めて修養の時代としていく。それがこの時代の風潮になったとき、21世紀の日本は素晴らしい時代を享受することになるに違いない。

心学をすすめる理由は以上である。

私の下手な道歌を掲げておこう。

敷島の和心を人間はば 神も仏も一つなりけり

渡部昇一の時事解説

北朝鮮のミサイル発射について

金正日の本当の意図はわからない。種々の説があるが、結局は不明。ただはっきりわかったことがある。

第一に、それはロシア、中国、韓国は決して日本の味方でないこと。

第二に、アメリカとの共同歩調を取れたことが救いであった。日米同盟の重要性を改めて実感する。

第三に、ブッシュ政権が小泉政権を支持してくれた理由の最大なるものは、イラク戦争に日本の自衛隊が援助したからである。昔、第一次大戦の時に、日本が陸軍の二個師団くらいヨーロッパに派遣しておれば、戦争のあとに日英同盟が解消されることもなく、日本はこの前の大戦に追い込まれることはなかったろう という歴史的教訓も思い出される。

第四に、このゴタゴタの間に韓国が竹島周辺の測量をやったことを忘れるべきでない。

第五に、北朝鮮や韓国に、反日的な火遊びをさせないだけの抑止力のある防衛計画を作るべきだ、という世論が大切だ。

ポスト小泉について

第一には、日米同盟関係を今と同じく固いものにして保つことのできる人。

第二に、中国や韓国のハニー・トラップやマネー・トラップに関係なく、筋の通せる人。

第三に、日本と中国とアメリカの関係を正三角形にするというような世迷言を言わない人。

第四に、軍事や地政学に理解のある人。

第五に、消費税以外の増税を考えない人。